

# ぶらぶらハウス栽培法による不知火の高糖完熟果安定生産技術

露地栽培の不知火は、生育後期の果皮障害を回避するため、1～2月に収穫し長期貯蔵してから出荷されるが、減酸は思うように進まず市場評価を下げる要因となっている。一方、発芽後採集した完熟果実は、糖酸のバランスが良く食味は優れるが、有袋栽培では多大な労力を要するうえに、果皮障害を十分に防ぐことは困難である。そこで、露地栽培において高糖完熟果を安定生産するために、有孔ビニール被覆栽培法（以下、「ぶらぶらハウス」）について調査検討した。



## 1. ぶらぶらハウスの設置法

ぶらぶらハウスとは、栽培後期に1樹ごと樹全体をビニールで覆う栽培方法である。樹の中心に支柱を立て、全体を覆うようにビニールを広げ、下部約50cmを開放し、マイカ線等で固定する。

ビニールの側面には、通気性と耐候性向上のため、直径約30cmのU字状の切れ目を入れ、次に、鳥獣害防止対策として、ビニール全体を魚網ネット等で覆う。ぶらぶらハウスの設置は、最高気温が25を下回る11月中旬以降から、果皮障害が発生する前までの12月下旬までに行う。

## 2. ぶらぶらハウスの有効性

4月中旬まで樹上越冬させた果実は、表1に示すように糖度が16度を超え、酸抜けも良く食味は非常に優れる。また、ビニール被覆によって、降雨や風雪から果実が保護され、果皮障害は有袋栽培と比較して大幅に減少する。4月以降は果皮の老化と気温上昇にともなって果皮障害が増加するので、収穫時期は、気象条件や果実分析結果を考慮し判断する必要がある。

冬季の樹冠内平均温度は、外気温と比較して約1上昇するとともに、季節風から直接樹体が保護され、表2に示すように、新梢の伸長や展葉は優れる。また、不知火は、果梗部が突出した果形が特徴であるが、収穫後も4月下旬頃までビニールを被覆することによって、良好なネックが出現し均一な果形となる。ぶらぶらハウスを連年被覆することによって、高糖完熟果安定生産の実用性が高いと考えられる。

（みかん研究所 主任研究員 菊地 毅洋）

表1 不知火のぶらぶらハウス栽培が果実品質及び果皮障害の発生に及ぼす影響（2007）

処理区	1果重 (g)	Brix	クエン酸含量 (g/100ml)	食味 <sup>1</sup>	ヤケ果		軸腐れ果		浮皮果	
					発生率(%)	発生程度 <sup>2</sup>	発生率(%)	発生程度 <sup>2</sup>	発生率(%)	発生程度 <sup>2</sup>
ぶらぶらハウス(1年目)	331	18.3	1.11	4.7	7.3	2.9	11.5	6.0	14.7	5.8
ぶらぶらハウス(2年目)	377	17.9	1.08	4.6	8.3	3.7	13.9	6.5	11.1	4.6
雨よけハウス	320	16.7	0.84	4.7	2.5	1.1	10.7	4.8	44.1	15.9
露地有袋栽培	319	17.2	1.01	4.5	39.7	17.5	85.7	52.9	17.5	6.9

2008年4月14日調査

1: 食味 (1: 拙い、2: やや拙い、3: 普通、4: 旨い、5: 非常に旨い)

2: 発生程度 =  $\frac{(\text{指数} \times \text{発生程度別果数})}{\text{調査果数} \times 3}$  発生程度指数 (0: 無、1: 軽、2: 中、3: 甚)

表2 不知火のぶらぶらハウス栽培が翌年の樹体に及ぼす影響(2007)

処理区	葉		葉色(SPAD)		結果母枝		着花 (1少-5多)	新梢 (1少-5多)
	幅(cm)	長さ(cm)	新葉	旧葉	長さ(cm)	葉数		
ぶらぶらハウス	7.8	3.4	52.5	72.6	14.7	10.6	3.5	3.5
露地栽培	6.8	2.9	52.2	70.4	11.4	7.7	3.0	3.0

調査日: 2007.5.18